

09の講義内容 言語文化「東アジア漢文文化圏」

— その5 タイと日本 —

タイは、人と人の繋がりを何よりも大切にしている国です。このタイと日本人がおつきあいをはじめて六〇〇年という長い交流の月日があると云われてきました。実際、明治二十年（一八八七）九月二六日の日タイ修好宣言（「日暹（にちせん）修好通商に関する宣言」）から来年二〇〇八年で一二〇年となります。日タイ修好百二十周年の年 在日タイ王国大使館 <http://www.thaibasssy.jp/index.htm>
<http://www.thai-japan120.com/study/000018.html>

日泰寺 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand/jpth120/knowledge/temple.html>

（ニツタイジ）：一九〇〇年にシヤム（現在のタイ）国王から贈られた「仏舍利」、つまり釈迦の遺骨を奉安するために一九〇四年に創建され、「日本とタイの寺院」という意味でこの寺院を「日泰寺」と名付けています。御本尊はこの御真骨と、同じくシヤム国王から贈られた釈尊金銅仏であり、御真骨を安置する「奉安塔」は一九一八年に。釈尊金銅仏を安置する新しい本堂は一九八四年にそれぞれ完成しました。この日泰寺は、仏教徒にとって最も価値のある真の「仏舍利」を奉安していることから、もいづれの宗派にも属さない日本で唯一の超宗派寺院であり、十九宗派の管長が輪番制によって三年交代で住職を務めている特異な寺院なのです。

※タイ王国の歴史 <http://www.thaismile.jp/index3.html>

※リゴール太守の名はオーク・ヤー・セーナー・ピムック。

日本名、「山田長政」 <http://www.mekong.ne.jp/database/person/yamadaganamasa/index.htm>

※タイ映画 <http://www.thainv.net/>

「アンナと王様」 <http://www.foxjapan.com/movies/anna/>

タイ国王・ラーマ四世（在位：一八五一年～一八六八年）とされる。王は、イギリスからアンナ・レオノーヴエンス女史（Mrs. Anna Leonowens）を家庭教師に招き入れ、西洋の教育を子弟に行う。

一八七〇年に「The English Governess at the Siamese Court」（英国婦人家庭教師とシヤム宮廷）を、一八七三年には「Siamese Harem Life」（シヤムの後宮生活）を著した。両書を元に、マーガレット・ランドンが小説「Anna and the King of Siam」（アンナとシヤム王）を創作。これがミュージカル「王様と私」や映画「アンナと王様」の原作となったという。※「王様と私」「アンナとシヤム王」（46）のミュージカル・リメイクで、俳優 Y・プリンナーの「荒野の七人」と並ぶ代表作。王子や王女の教育係として、シヤム王の宮殿にやってきたイギリス人女性アンナが、封建的で前時代的な王宮に、文化と愛情をもたらしていく様を描く。当たり役と言われただけに、プリンナーの個性は強烈で、対する D・カーも上品な美しさと芯の強さを見せつける。《出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』参照》

「象（かい）」→「星になつた少年」 http://www.apple.com/jp/quicktime/trailers/toho/hoshi2_large.html

家族想いの小川哲夢は、両親の不和やいじめが原因のため内にこもりがちだったが、仔ゾウ・ランディとの出会いにより心を開き、日本人初の象使いを目指しタイへ留学する。人一倍の努力によって人種を超えた友情とゾウの信頼を得た哲夢は青年へと成長を遂げる。帰国し、象使いとして活躍し始める哲夢は……。実話から生まれた、

感動の大作。(原作)坂本小百合「ちび象ランディと星になった少年」(文藝春秋刊)

※タイの古典音楽 <http://ml2.naxos.jp/album/76010-2>

<http://www.thaiembassy.jp/culture/music/index.html>

※[タイの子ども絵本](http://www.geocities.jp/thainokodomonhon/index.html) <http://www.geocities.jp/thainokodomonhon/index.html>

※タイ国チェンマイの日本語フリーコピー誌「ランナーエクスプローラー」<http://lannaexplorer.com/>

※[タイ国立図書館](http://www.thai-japan120.com/study/000018.html) <http://www.thai-japan120.com/study/000018.html>

※[タイ国立博物館](http://www.thailandmuseum.com/Index.htm) <http://www.thailandmuseum.com/Index.htm>

※[タイの地元新聞を読む](http://thaina.seesaa.net/) <http://thaina.seesaa.net/>

※ **[PDF]** [タイにおける日本語教育活動の概況?](http://www.soc.nii.ac.jp/nkg/database/2002chosa/02chosa-09f.pdf)

<http://www.soc.nii.ac.jp/nkg/database/2002chosa/02chosa-09f.pdf>

※[修学旅行で異文化体験](http://www.thailandtravel.or.jp/study/index.html) <http://www.thailandtravel.or.jp/study/index.html>

[中学2年生総合学習の実践報告](http://www.kyokyo-u.ac.jp/KYOCHU/sougaku/2grade55home.html) <http://www.kyokyo-u.ac.jp/KYOCHU/sougaku/2grade55home.html>

[アクションリサーチ タイ](http://www2.rikkyo.ac.jp/web/hanaka/02/A-Thai01.html) <http://www2.rikkyo.ac.jp/web/hanaka/02/A-Thai01.html>

※[女性向けのタイ情報「パイタイ」](http://www.patthailand.com/) <http://www.patthailand.com/>

※小泉順子著『歴史叙述とナショナルリズム―タイ近代史批判序説』東京大学出版会 (2006-02-27 出版)

ナコーンシータマラート

ナコーンシータマラートがリゴールと呼ばれていたアユタヤ王朝時代、リゴールの太守がこの地で静かに人生を終えた。そのリゴール太守の名はオーク・ヤー・セーナー・ピムック。日本名、山田長政である。

リゴールは、パタニ王国など南部のマレー系王朝との最前線基地でもあり、町の周辺に城壁をめぐらせた要塞都市でもあった。城壁は当初は、木の柵程度のものであったようだが、後にレンガで都市を囲った。現在でもそのレンガ造りの城壁跡を見ることができる。



山田長政は、一五九〇年に尾張で生まれたが、父が早逝し、母は実家の駿河国安倍郡藁科村の寺尾家に戻った。長政が三歳のとき、母は伊勢神宮の御子（お札を旅をしながら配って歩く下級神官）で、浅間神社近くの馬場町で染工（紺屋）を営んでいた山田九平次の養子であった久左衛門友昭と再婚したと伝えられている。

今川家の菩提寺で読み書きを習い、浅間神社前、宮ヶ崎の町道場で武芸に励んだが、その後、一時沼津藩で駕籠かきをした後、元和三、四年（一六一七〜一六一八）二十七歳頃にシヤムに渡るため駿府から台湾行きの船、「富士丸」に乗り込み、さらに台南からシヤム行きの便船を待ち、長崎の豪商、木屋弥左右衛門の御朱印船に乗り込み、アユタヤの日本人町に乗り込んだと思われる。国外へ飛び出した動機は、駿府郊外で殺傷事件を起こし、警吏に追われていたためともの説もあるが、はっきりしたところは分からない。



長政は、アユタヤ郊外にあった日本人町（バーンイープン）の発展と軌を一にして、シヤムの鹿皮、鮫皮、蘇木を買い集め、オランダ商館に納入する仲買商人として、また日本、交趾（ベトナム）、バタビヤ（ジャカルタ）などとの交易で莫大な財をなし、最盛期に三千人を越えたといわれる日本人町の首領となった。

八〇〇人も兵を率い、各地の反乱を平定するなど、日本人傭兵隊長（クロムアーサーイープ）としても活躍した長政は、ソングタム王にも重用され、政権第三位の船大臣（チャオプラヤー川に入る船から税を取る権利を有する重職）を務め、一六二九年アユタヤ王朝の「オークヤー・セーナーピムック」（最高位の貴族に与えられる爵位）にまで登りつめた。

ソングタム王の死後、チェーターティラーとシーウォーラウォン（後のプラーサートーン）の王位争いが始まった。長政はソングタム王に立てたことで王位争いは収束したように見えた。ところが、王となったチェーターティラートを王に立てることに暗殺され、両派の争いは列度を増すこととなった。

その後チェーターティラートの弟のアーティッタヤウォンが幼帝としてたてられたが、シーウォーラウォン待望論が官吏を中心に盛り上がった。この動きに断固反対したことが長政にとって、大きな転機となった。

この対立に目をつけたのは、アユタヤ貿易を一方的に牛耳っていた日本人と対立関係にあった華僑勢力である。華僑グループはシーウオーラウオン待望論に傾く王宮を支持し、長政は支持基盤を失った。

やがて、シーウオーラウオン改めプラーサート・トーンがアユタヤ王朝の代目の王としてその地位に就くと、長政はリゴール防衛のためという名目で太守としてリゴールに赴くこととなった。事実上の左遷である。

1630年、パタニ王国との交戦の後、長政は前リゴール長官の弟、オプラ・マリットによって脚に負った傷口に毒入り軟膏を塗られ暗殺される。長政の長子オークン（クン・セーナーピムック）がリゴール太守を継承するが、その直後に日本人傭兵によって殺害される。プラーサートトン王の動きは早かった。長政の死と同じ年、日本人は反乱の可能性があると見て、シャイフ・アフマドらを率いるアラビア人、タイ族、華僑からなる兵によってアユタヤ日本人町は焼き討ちされた。1639年には、お得意さまであったアユタヤのオランダ商館が閉鎖、日本―シヤム貿易から撤退しており、また江戸幕府の鎖国政策もあり、アユタヤの日本人町が以前の栄光を取り戻すことはなかった。



い公園の一角に碑が建てられた。そこにある碑文は以下の通りである。

※長政の死から370年たった2001年、地元で日本庭園と呼ばれている美し

碑文に向かう石段の右端には、ナコーンシータマラート市長のメッセージが刻み込まれている。その内容は以下の通り。（右上の写真）

「タイ南部ナコーンシータマラート県」

「山田長政この地に眠る」



平成十三年八月二十四日、タイ南部ナコーンシータマラート県にて、日本側から在タイ日本国大使、盤谷日本商工会議所会長、日本人会会長のほか日系企業の代表らのご参列をいただき、山田長政記念塔の除幕式が盛大に開催されました。

正法の都という意味をもつナコーンシータマラートは静岡県出身小山田長政が寛永七年（一六三〇年）に没した地です。

この記念塔は、森前首相のご協力をいただき、また同県商工会議所が中心となって寄付金を募り完成しました。記念塔は、同県内の春日文化交流公園内（通称、トウタラート公園）に建てられています。記念塔の高さは三メートル、筆毫『山田長政この地に眠る』は森喜朗前首相の直筆です。公園内には、タイと日本友好の証として、ご来賓の手によって県木であるユーカリの木が記念植樹されています。

山田長政（駿河国、今の静岡県に生まれ、山田仁左衛門という。）は、タイ・アユタヤ王朝の傭兵隊長として活躍しました。当時、ナコーンシータマラート県は、アユタヤ王朝の最南端の地であり、古代から貿易の盛んな所でした。仏教が伝来した地としては特に有名で、タイを代表する深い歴史ある国宝級の品々や名所が今でも多く残っております。ここは、タイ族最古の王朝であったスコータイ王朝の成立以前から存在していた東南アジア屈指の古都とも言われております。歴史を紐解くと、山田長政は権力のあった人物だけに、山田長政像について記録した古典が多く残っております。

そして、この地は太平洋戦争で多くの対の兵士もなくなっており、これまでの歴史上悲しい傷跡の多い場所でもありました。

新しい世代、過去の経緯をあまり知らない若者が多くなった今日、永遠なるタイ南部ナコーンシータマラートと日本の平和と友好を誓い、相互の理解でこれを維持していくことが私たちに与えられた使命であると考えております。

ナコーンシータマラート県は、バンコクからやく八〇〇km南、バンコクから飛行機で約一時間の距離にあります。

おかげさまで、最近では多くの日本の方々にご来県いただいております。自然に囲まれたきれいな海、リゾートホテル、美味しい果物、タイを代表するヤンパリオ籠や影絵芝居などが自慢です。

皆様のお越しを心よりお待ちしております。尚、市役所では、ナコーンシータマラートの日本語観光案内書をご用意いたしております。是非、お立ちより下さいませ。

平成十六年六月

ナコーンシータマラート市長 ソムヌック・ケチャラット

※碑の左側にタイ語、右側に日本語で、その由来が書き記されている。以下、その全文である。

「山田長政の碑建立について」

アユタヤは一三五〇年から一七六七年の四一七年間シャム（タイ王国）の首都であった。

日本との交易も盛んで朱印船も多く日本人町もあり、全盛期三千人の日本人が居たと云う。

山田長政は（駿河・今の静岡県の出身と伝えられている）日本人町の首領となり活躍の後にリゴール（今のナコーンシータマラート）



の太守となり寛永七年（一六三〇）この地で客死したと伝えられている。山田長政については諸説があるが、日本との友好を願うタイの人たちの暖かい気持ちと広い心でここ終焉の地に記念碑が建立された。

この日は新しい世紀を迎え、両国の友好親善がさらに深まることを願い建立されたことを日本の多くの人たちに伝えたい。

平成十三年（二〇〇一）八月二十四日

日本国際ボランティア交付団体

石川県タイ友好協会

会長前田勝紀

※森喜朗氏は、平成十二年から十三年日本国総理大臣

《「イツテミタ」から載録》